

国立民族学博物館の収蔵品 69

東南アジアにおける銅鼓



写真1 銅鼓（ラオス）



写真2 銅鼓（インドネシア）

銅鼓は過去二〇〇年以上に渡り、東南アジアで使用されてきた青銅器だ。東南アジアで広く楽器として利用されるゴングのプロトタイプでもある。銅鼓は片面太鼓の仲間で、鼓面は一つしかない。博物館では鼓面を上にして展示されることが多いが、実際には胴部にある把手に紐を通し、鼓面が横になるように吊るして叩く。日本では弥生時代に、鐘（ベル）のプロトタイプとなる銅鐸が流行したが、こちらも吊るして使われたようだ。どちらも単なる楽器ではなく、祭祀や葬送儀礼とも密接につながる神聖な金属器でもあった。

さてこの銅鼓、東南アジア展示場では二つの異なるタイプを見ることができる。一つはラオスで収集された銅鼓（写真1）。これは、ベトナムが起源地とされてきたドンソン銅鼓に属し、最も普及した銅鼓

の一つでもある。東南アジアで収集された一五〇点の銅鼓を対象とした、フランツ・ヘーゲルによる最初の比較研究（一九〇二年）により、古い時代から新しい時代にかけて四つのタイプが知られる。展示品の銅鼓は、このうちヘーゲルⅠ式とされる古いタイプに相当する。鼓面中央に星のマークが入り、蛙のような動物像が四方に見られる。一方、胴部に装飾された動物像はゾウのようでもある。これに極めて類似する銅鼓は、ベトナムの国立歴史博物館にも陳列されており、ドンソンかその周辺で製作された可能性が高い。

ドンソン銅鼓は、金属器時代より紅河をのぼり、ラオスの山岳地帯へと流通した。その一方で銅鼓は海も超え、ジャワ島やバリ島、スリダ列島といったインドネシア西南部の島々へも広く流通した。土器や石器が中心だった当時の人々にとって、金属器が与えたインパクトは相当なものだったろう。たとえばラオスでは、その後も民族誌時代に至るまで、金属器時代に製作された銅鼓が儀礼や祭祀の際に使われてきた。銅鼓は二〇〇年以上にわたり、その役割を果たしてきたともいえる。

さて展示場でみれる二つ目のタイプは、インドネシアのアロール島で製作・利用されてきたモコと呼ばれる銅鼓である。モコは金属器時代に海を越えて流通したドンソン銅鼓の影響を受け、島で独自に生まれた。その独自性は、縦長の胴体や把手の位置、人面文様などにも見ることが出来る。このモコも、近年に至るまで祭祀に欠かせない祭器や貨幣として、利用されてきた歴史を持つ。

今、展示場に静かに並ぶ二つの銅鼓は、正直それほど目立つ存在ではない。しかしこれらの銅鼓は、はるか金属器時代に東南アジアの大陸部から島嶼部にかけての人々の交流の歴史と、二〇〇〇年に及ぶ人々の信仰を私たちに語る無二の存在でもあるのだ。

（小野林太郎）